

| | |
|--------------|---|
| Title | 『阪大日本語研究』5号 1993.3 要旨 |
| Author(s) | |
| Citation | 阪大日本語研究. 5 P.111-P.114 |
| Issue Date | 1993-03 |
| Text Version | publisher |
| URL | http://hdl.handle.net/11094/6018 |
| DOI | |
| rights | |
| Note | |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

日中同形語の文体差

宮 島 達 夫

キーワード：日中同形語，文体的特徴，『岩波中国語辞典』，位相

日中同形語については、これまで主として意味の差がとりあげられてきた。それが中心的な問題であることはたしかだが、さらに、ほぼ同義の同形語でも、日中間に文体的特徴の差がみられるばあいがある。中国語の文体的特徴（硬度）を全語彙にわたってランクづけた『岩波中国語辞典』によって、日本語における文体との差をしらべると、名詞・動詞・形容詞などの各品詞にわたって、中国語でふつうの無色透明な文体、または、ややあらたまった程度の文体に属するものが、対応する日本語では、かなり高級な文体に属する、という例が、かなりみられる。その逆に、中国語よりも日本語の文体的位置が上、という例はすくないが、ないことはない。

関西中央部における「オル」・「～トル」軽卑化の

メカニズム

井 上 文 子

キーワード：関西方言，アスペクト表現，敬語行動，卑語，「～ヨル」

関西中央部では「～ヨル」の卑語的使用，存在動詞「オル」やアスペクト表現形式「～トル」の軽卑的使用が認められる。現代大阪市での用法を例にとると、一般に，（「～オル」>）「～ヨル」は卑罵表現であり，また，「オル」は人の存在を，（「～テオル」>）「～トル」はアスペクト表現の進行態・結果態を表しつつ，心情的でぞんざいな言い方として捉えられている。そして，「イル」・（「～テイル」>）「～テル」が中立待遇の形式なのである。

本稿では，これらの形式の成立の事情を検討し，それぞれの分布域を確定した。そして，フィールドワークによって得られたデータを基に考察を行った。その結果，「～ヨル」が卑語形式として独立した背景にはアスペ

クトの統合が関与していること、「オル」・「～トル」の軽卑化の前提として「イル」・「～テル」が併存形として存在していること、さらに、軽卑の「オル」・「～トル」の領域内においても微妙な待遇の場面把握の差があることなどを明らかにした。

尊敬の助動詞「ハル」の成立をめぐって

——明治期大阪語の場合——

金 沢 裕 之

キーワード：明治期大阪語，尊敬助動詞，「ハル」，速記本，SPコード

明治期大阪語におけるナサル系敬語辞を、落語資料（中期の速記本，末期のSPレコード）を利用して調べた結果，尊敬の助動詞「ハル」は，この期間に成立したと考えられ，上接語との関わりから見ると，下一段動詞，五段動詞及び「(動詞連用形+)て」の場合から発展していったらしいことがわかった。

また「ハル」と上接五段動詞との接続においては，従来一般的に考えられていた，イキナハル→イキヤハル→イキャハル→イカハル—（「ハル」が析出されて）→イキハル，という変化ではなく，イキナハル→イキハル
クレナハル→クレハル，という変化があった可能性が強く（上一段動詞「居る」の場合は「イヤハル」），同時期京都を中心に成立したと予想されるイカハル形は，イキハル形の成立後に大阪に進出した可能性が考えられるようになった。

二重ヲ格制約と第2言語獲得

阿 部 忍

ダグラス・サディ

キーワード：使役構文，二重ヲ格制約，第2言語獲得，普遍文法（UG），有標性（Markedness）

日本語を第2言語として学習する英語のネイティブ・スピーカーの文法が二重ヲ格制約に従うかどうか，使役構文を用いた文法性判断テストによ

って調査した結果を分析・報告する。

テストの結果が示すデータは、彼等の文法に二重ヲ格制約が組み込まれていることを強く示唆する。

また、この結果が、普遍文法（UG）への直接のアクセスと二重ヲ格制約に従う文法が無標の値を持つこととを仮定することにより導かれることを論じる。

「テハ」条件文の制約について

塩 入 す み

キーワード：順接条件，反期待性，蓋然性，当然，独立度

順接条件と言われる「テハ」の構文の特徴，および制約は，①主節に望ましくない事態を表すものが多い，②主節に過去の1回の出来事を表すことができない，③主節の文のタイプに制限がある，という3点にまとめられるが，①②③共に，より細かな観察が必要である。

「テハ」節は話し手の確実な知識を提示し，そこから結果を推量するもので，その結果となる事態に対して表される蓋然性は程度の高いものである。

また，節の独立度において，「テハ」節はB類の補足節を主題化したものに相当し，名詞節，副詞節の両面を持つ。

モラウの意味的抽象化・希薄化の過程

由 井 紀 久 子

キーワード：モラウ，～テモラウ，意味の抽象化，意味の希薄化，概念化

受給モラウは，補助動詞用法ではより抽象化された対象を扱う動詞へと意味変化を起こす。小稿ではモラウの意味成分〈移動〉〈起点〉〈着点〉〈方向〉〈働きかけ〉を立て，その意味成分を基にして抽象化・希薄化の過程を考察した。本動詞用法のうち最も弾力性のある成分〈移動〉が，補助動詞となった時も，抽象化を起こしやすい成分となる。抽象化は〈具体

物><行為><事態>へと進んで行くが、これらは「何」で概念化できるもので、抽象化はひとつの概念で纏められる範囲の中で進むという仮説を提出した。

聞き手の行動 ～あいづちの規定条件～

今 石 幸 子

キーワード：あいづち、バックチャンネル、理解している信号、機能、形式

日本語教育において学習者のコミュニケーション能力を目指し、あいづち研究が進められている。しかしその定義は研究者間で異なっており、明確な一致が見られない。そこで、あいづちの定義づけに必要と思われる項目を4つあげ、そのうち「機能」「形式」の2つの観点からあいづちの定義づけを試みた。まず、コミュニケーションプロセスモデルから、あいづちを話し手の発話を「理解している信号」とした。情報伝達過程において、聞き手は不確定な話し手の発話意図を確定するのだが、確定したとき「理解している信号」に肯定否定、感情表現のような自己の態度を加えることもある。また、機能を下位分類することによりそれらの重複を避けた。形式では典型的な「いわゆるあいづち」（あいづち詞）が存在するため、聞き手のフィードバック情報全体をバックチャンネルとし、あいづちをその一部とした。あいづちは表現形式が多いため、他の言語形式や非言語形式との性質の違いを明らかにしながら規定した。